



Title	西郷隆盛はどのように語らせられてきたか
Author(s)	岡島, 昭浩
Citation	語文. 2019, 113, p. 39-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77686
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

西郷隆盛はどのように語らせられてきたか

岡 島 昭 浩

一 問題点

原口泉(二〇一八)『西郷隆盛はどう語られてきたか』(新潮文庫)と題する著書があるが、西郷隆盛が、創作や回想の中でどのような言葉で語っていたか、語らせられてきたかという問題がある。現在であれば、西郷隆盛は当然のように、薩摩弁的な語り口で語ることになっているが、それが、当初からそうであったのか、当初からでないか、いつからそうなったのか、という問題である。それについて参照すべきものには、役割語や方言キャラの観点から金水敏(二〇〇八)・田中ゆかり(二〇一一)・田中ゆかりほか(二〇一八)などがあるが、方言文献学の観点から吉町義雄(一九三七)がある。

これは、九州の「現代方言文学」についての書誌を作るという一環として、「西郷南洲を主題とした単行書のみ」(明治三二年から昭和一三年まで)を取り上げ、地の文が文語か口語か、篇中に

鹿児島語があるか否かを示したものである。「西南戦争文学」や「池田大伍傑作『西郷と豚姫』の様な歌舞伎新作」を対象にしていることを断りつつ、以下のようなものに鹿児島語が見えることを示している(リストの中から、鹿児島語が見えると見做しているゴチック体のものを抜き出す)。注も吉町の記したママである。

大正期

□西郷隆盛伝 下中弥三郎(芳岳) 元年八月 洋一 内外出版協会「こあす」位

□大西郷秘史 田中邁逸 三年一月 洋一 武俠世界社
「ソゲン」「オイドン」「晋殿!」「晋殿!!」 やつてくりやれ。もう此処で可か事御座んす」

□言行史伝／大西郷全史 田中邁逸(花浪) 上編 六四年 四月 洋一 大倉書店 稍々

□西郷秘史／大西郷の心の奥底 附録福沢先生の丁丑公論等 石川平太(蘇山) 六年 洋一 肥後方言が活躍する

□南洲手抄言志録解話 附西郷家々譜、南洲先生年譜 馬場

緑郎 一二年四月 洋一 一指園 肥後方言らし

□西郷南洲 伊藤痴遊 一四年一月、洋三 忠誠堂 方言
は「こぎゃん」等の肥後式混入

□西郷隆盛 下中芳岳 一四年九月初版 洋一 寓生閣 少
し

□南洲号 日本及日本人第八十九号 一五年一月増刊

□大西郷言行録 江東天風 一五年九月初版 洋一 中央出
版社 「おい」「申さう」位

○□大西郷全集 大西郷全集刊行会 第一巻 一五年十二月
平凡社 薩摩特有書翰文用語が散見す 大正期三冊本の
普及版

□西郷南洲 西尾麟慶 評判講談全集 第二巻所収 一五年
十一月 洋一 大日本雄弁会講談社 「ごわす」「申す」
式

昭和期

○□大西郷全集 大西郷全集刊行会 第二巻 二年六月 第

三巻 (完) 十一月 平凡社

□奄美大島と大西郷 昇直盛(曙夢) 二年十月 洋一 春
陽堂 本格的に近い鹿児島方言を使用す

□西郷南洲 伊藤痴遊 四年四月 洋二 忠誠堂 大西郷記
念大展覧会写真帖 七年 洋一

□西郷南洲 木村毅 九年二月 洋一 千倉書房 一九三三

年「九州日報」連載 「おいどん」「見ゆる」位

□西郷南洲 伊藤仁太郎(痴遊) 実録維新十傑 第一巻(九
年九月初版) 第二巻(九年十二月) 第三巻(十年一月完)
平凡社 同工異曲

□大西郷秘史 田中萬逸 九年十月 洋一 叢文閣 大正期
版の改版

〔□は文語文、○は口語文〕

これによれば、大正の初めごろから、「鹿児島語」が使われてい
ることが伺える。

方言ステレオタイプについての田中(二〇一一)では、「坂本龍
馬はいつから土佐弁キヤラになったのか」という問題について、
司馬遼太郎の「竜馬がゆく」(一九六二〜一九六六)から、その
「方言キヤラ」化が定着したとしているが、西郷隆盛についても、
坂本龍馬と同様に、昭和の半ばをすぎしてから「方言キヤラ」となっ
たと考えているようである。

田中は、和田勝一「海援隊」(一九三九)に対して、「くだけた
場面では「土佐弁」的要素がときに与えられるが、全面的に「土
佐弁」的要素が与えられる段階、つまり龍馬を「土佐弁キヤラ」
として確立させる段階には至っていない」としているし、濱本浩
「海援隊」(一九四二)についても、「西郷隆盛」のセリフにも「薩
摩弁」の対称詞「オハン」がちらりと入る程度」で、「方言キヤ
ラ」としての萌芽はみられるものの(中略)「方言キヤラ」として
確立された存在となっていないとはいえない」としている。

さて、東條操が『真山青果全集』の月報第七号(第二卷付録、昭和一六年六月)に寄せた「戯曲と方言」という文章がある。『東条操著作集』(ゆまに書房、一九九五―一九九七)未収録(最終巻にある著述目録にも未掲載)でもあり、長めに引用する。

真山さんが早くから方言に関心を持たれた事は『南小泉村』の著者である事を考へればすぐ分る。私は方言をすこし調べてゐる関係上、今度も全集中の戯曲の方言の扱ひ方を興味をもつて拝見してゐる。たとへば『西郷隆盛』である。薩摩訛は江戸の戯作者の昔から写されてゐた特徴の多い、真似のし易い方言ではあるが、これはまたさても見事に写した事かなと全く感心してしまつた。方言のむづかしさは相手の身分の高下によつて言葉を使ひわけてゆく微妙な色相の差別にある。一々の引例は省くがそれがこゝには立派に出来てゐる、殆どまことに神技に近い。ところが『城山落城の日』になるとうまいにはうまいが少し前のとは扱ひが違ふ。(中略)

とにかく拝見してゆくと戯曲によつて方言の扱ひ方に違ひがあるやうである。私はハテナと思つた。あの克明な、物にこる、一言半句も調べに調べ練りに練り上げる真山さんである。これは迂濶に筆はとれないと思つた。この疑ひをはらしたのでその由を申上げると、態々第六天(引用者注——小石川区第六天町。現在の文京区小日向・春日)の御宅からw氏が尋ねてきて下すつた。以下に記すのは同氏が話した真山さんの戯曲中の方言の扱ひ方の要領である。これは恐らく本

全集の読者にもかなりな参考になる事かと思ふ。

先生も昔は方言描写に於てかなりなりアリストであつた、これは初期の御作を見ればよく分る。ところが写實的に方言を入れた戯曲の放送なり演技なりに接してみると、演技者が方言を真似よう／＼と思へば思ふほどその効果は思はしくない場合が多い。方言は他所者には理解がむづかしい、そのくせ土地つ子の耳には似非訛りは聞いて腹が立つか、をかしいかである。戯曲の方言移入はこれでは駄目だ、やはりほんとならしい嘘が入用なのである。

戯曲に方言を加へてゆく匙加減は、まづ戯曲の種類によつて違ふ。時代物には必要でもなるたけ控へ目にするのが無難で、世話物ならかなりの程度は入れてよく、新劇ともなれば一層自由でいゝ、うまく使へば写實的に使つても差支へない。次には役柄で違ふ。主人公にはなるべく避けるのが常法で、脇役から端役、仕出しとなると相当に方言を加へてゆく、これが場面の空気を作る。尤も何にも例外はある。例へば南洲翁の如きは当然薩摩訛でなければお客が承知しない、南洲翁と同夫人の言葉とではこんなところから手心が違ふ。つまり役柄によつて七分、五分、三分といふやうにそれ／＼混ぜて工合が違ふのである。第三には方言の種類によつても違ふ。大衆の熟知してゐる方言——例へば京、大阪の方言とか鹿児島

の方言など——なら、なるべく生粋に近い形で入れる。これとは逆で、あまり大衆に耳なれない方言なら大体それらしく

感じる程度に入れる。例へば上州の方言などなら世間が知つてゐる円朝の塩原多助程度のもので差支へない。劇は大衆を相手にするもので、方言を入れるのは舞台にある気分を出すためである。なほ細かく言へば、上演にはそれを演じる俳優の個人性を考へる必要がある。上方役者なら勿論だが、新派の人達には器用に上方言葉を使ひこなす人が多い。こんな時は本人にまかせておいても間違ひはないが、時には方言は苦手だといふ俳優もある、こんな場合は台本から方言を省く必要もある。

まアW氏の談話の要領は——聞き損ひもあらうが——ザツとこんなものであつた。(以下略)⁽¹⁾

「薩摩訛は江戸の戯作者の昔から写されてゐた」例としては、古くは近松の「平家女護島」の「薩摩なまり」⁽²⁾、「浮世風呂」や「八笑人」を上げればよいだろうし、明治以降は、巡査のクヤクヤが多数見られ、二葉亭四迷訳の「四人共産団」(明治三十七年)における薩摩弁使用もある。

青果の「西郷隆盛」は、『講談倶楽部』昭和十四年一月号—三月号掲載で、昭和十五年九月初演(全集第九巻による)で、「城山落城の日」は『講談倶楽部』昭和三年九月号掲載で、昭和四年二月初演(同上)である。「西郷隆盛」では、西郷も大久保も鹿児島島言葉を使う。「城山落城の日」には西郷隆盛本人は登場せず、子の「寅太郎」「午二郎」、姪「みつ子」、甥「隆準」、妻の「糸子」、川口雪蓬などが、「そいが好か」などの台詞を語るものである。

また、ここでは触れられないが、「江戸城総攻」三部の中篇にあたる「慶喜命乞」(昭和五年初出、初演は昭和八年)、終篇「將軍江戸を去る」(昭和九年、初演初出)にも、西郷がいて、「慶喜命乞」では山岡鉄太郎と「何んでござすか」などと、「將軍江戸を去る」では勝安房と「四年ぶりでごわせうか」などと、薩摩人以外との会話においても「ごわす」「申す」のような言葉を使って会話をしている(両作品とも全集第七巻による)。⁽³⁾

W氏の発言で注目されるのは、真山作品での薩摩弁の使われ具合に加えて、昭和一六年の時点での「南洲翁の如きは当然薩摩訛でなければお客が承知しない」ということである。これは、具体的にはどういうことであつたのだろうか。⁽⁴⁾

同じく『真山青果全集』月報の、第十号(第八巻付録、昭和一六年一〇月)に『中央公論』の「文芸時評」から転載された正宗白鳥「坂本龍馬」は、真山青果「坂本龍馬」⁽⁵⁾を評したものであるが、

私は読み乍ら、東北人たる作者が、西国の人と土地を書いてゐることを感じた。真実に即した立場から云ふと、西国の地方色や西国人らしい情調に乏しいと云つていい。默阿弥の「島千鳥」の松島千太と明石の島蔵とには、大まかながらも、東北人と中国人との面目が現はれてゐる。徳富蘆花の『黒潮』に出て来る肥後人や長州人にも、何処となくその出生地の面影が見られる。真山氏の新作の人物には『土佐つば』らしいところや、長州人らしいところが、さう現はれてゐないやう

である。言葉に土佐訛りや薩長の土語を殆んど用ひなかつたのは、取つて付けたやうに所々に用ひるよりも、却つてサツパリしていゝのであるが、それにしても、台詞に土の臭ひがない。田舎の青武士が一知半解の理窟を振り廻してあばれてゐるにしては、台詞が調ひ過ぎてゐる。中村吉蔵氏『井伊大老』などの幕末物の西国武士の無器用な、締りのない台詞に、どことなくあの頃の若い下級の武士らしい趣きがあつたやうに思ふ。

しかし、現代の写実劇とは違つて、過去の時代を題材としたものは、周到な客観性を具へて現はし得られるものではないので、『坂本竜馬』くらゐに人と時とを書き現はせたら、史劇として上乘としていゝのである。

とある。中村吉蔵の作品は「井伊大老の死」(大正九年刊、天祐社)であろうか、そこで有村次左衛門の台詞は次のようである。⁶

「オイ、コヤ、その座敷は、暮六つから、己どんが借切の先約になつちよるんぢや……かへてくれんか? 何? かへてくれん? よし……かへてくれんぢやア、己どんが皆、引ずり下ろしてやる」

「こゝの座敷は暮六つから己どんが借り切つちよるんだ、皆、下へ下りろ下りろ」

これは町人への言葉だが、有村は、「よか」も使うし、水戸藩士などとの会話では「こわす」「こわせん」を使用している(水戸藩士は使用しない)。

吉町も示していた池田大伍「西郷と豚姫」⁷は大正六年の初演であるが、西郷は「おはん」「おい」「うどん」の他には、薩摩弁をさほど使つておらず(わずかに登場する大久保市助も同様)、中村半次郎が「こわす」⁸を多用するのとは違つてゐる。

このあたりは、薩摩藩士に薩摩弁を使わせる、ということのようであるが、このころまでの状況をもう少し見たい。

二 演劇脚本の中の西郷

西郷隆盛を題材とした演劇は、羽田義朗(一九二六)、野中敬吾編(一九七〇)などによつて知られる。

「濤乗船開化初夢」⁹は、明治初年に横浜で初演されたものだし、西郷吉之助は四幕目に拝郷七之助の名で登場するが、歌舞伎調であり、脚本で見ると、薩摩弁らしき文言は見えない。

河竹黙阿弥の「西南雲晴朝東風」(明治一一年)は、渡辺保(一九九七)が記すように、一部を除いて脚本が残つておらず、同名の合巻によつて内容を知ることが出来るのみである。西郷を演じたのは市川団十郎であるが、渡辺が引用する、観劇した依田学海の「学海日録」明治一一年三月一七日に「その言語なども薩摩なまりをまじへて、かの人はさこそあらんと思はする処妙なり」¹²とある。

明治三六年初演の高安月郊「江戸城明渡」(同年刊、博文館)¹³での西郷は、しばしば「ごあす」を用いる。第三段の其三が、勝海舟と隆盛の会見であり、通常の物言いに進むが、海舟の「お引き

受け下さるか」の問いに、「先生——月照上人と死ぬ時より悲しうござす」と「ござす」を使う。感情の高ぶりで方言が露出した、ということであるようにも見えるが、其三の最後の台詞も「天地の道は一でござす」である。後藤隆基（二〇一六）に、勝海舟を、福岡出身の川上音二郎が演じたことによる批判が多くあったことを示している一方、杉廣阿弥が「高田（実）の西郷吉之助が薩摩弁の繰り方」を評価したものがあったことも示している。⁽¹⁴⁾なお、高安月郊には「月照」もある（明治三五年初演、『月郊脚本集一』（大正五年、自刊⁽¹⁵⁾）所収）が、ここでは西郷は、一貫して薩摩弁を使わない。

岡本綺堂の「西南戦争聞書」（大正一一年初演、『綺堂脚本集三』）、その続編「城山の月」（同年初演、『綺堂脚本集六』）では、薩摩弁的要素は「ござす」のみだが、多くの場面で使われる。⁽¹⁶⁾三宅雪嶺「邊見十郎太」（大正一四年）では、「ござす」「おはん」を使う人も居るが、西郷はそうした言い方はなく「うぢや」が中心である。⁽¹⁷⁾

吉田絃二郎「西郷吉之助」（吉田絃二郎『運命の秋』大正一四年改造社⁽¹⁸⁾）では、勝海舟との会見場面でも、西南戦争中でも、一貫して通常の物言いである。

松居松翁「江藤新平」（『松翁戯曲集』大正一五年、春陽堂⁽¹⁹⁾）では第三幕で江藤と西郷の会話があるが、西郷は、「おいどん」「おはん」「ござす」を使う。

鈴木彦次郎「西南拳兵録」（大正一五年『新小説』に発表⁽²⁰⁾）。西

郷も含めて全員が、「ござす」「よか」「俺^{おれ}」などの薩摩弁的物言いである。「どぎやお考へでござす」のような肥後的要素と思われるものも混じる（薩摩は「どげん」で肥後は「どぎゃん」）。

羽田（一九二六）の載る『日本及日本人』南洲号に載せられている戯曲が二つあり、一つは伊藤恣「西郷吉之助」で、「おはん」「おい」程度だが、もう一つの田中鉄軒「史劇 西郷隆盛」は、「台詞中に用ゆる薩摩地方の方言」という注釈があるなど、西郷・大久保も含めて薩摩弁が多く使われる戯曲である。田中鉄軒は、鹿児島人であり、明治四二年に『絶島の南洲』（内外出版協会、大正一〇年に『国民思想の善導と西郷南洲』（広文堂書店⁽²¹⁾）という著書があるが、ここでは、西郷を含めて、薩摩弁的な語りはほとんど見当たらない。南洲号の戯曲以外では、村上素道「南洲翁と蓮月尼」で「私は西郷でござす、宜く取計らひます、難有うござす」（二一〇頁）と語り、岩永三省「拳兵前後の事情と逸話」で、「ソゲンコタ（そんな事は）私の知った事ぢやゴワハンカラ勝手にシヤンセ（なさい）」（一八五頁）と大きな声を出す。

三 講談などの西郷

次に、講談の類を検討したい。吉町（一九三九）も田中（二〇一一）も、いわゆる講談の類を示していないが、吉町の示す中にある伊藤痴遊は講釈師であり、地の文は講談調ではないが、会話の混ぜ方などは講談を思わせるものである。吉町は大正一四年のものを見ているが、伊藤痴遊「西郷隆盛」の初刊は明治四三年で

ある（統編も同年刊、終編は翌年刊）。

この作品について、吉町は「方言は「こぎやん」等の肥後式混入」と記すが（上述のように、薩摩では「こげん」、薩摩方言の実態との差はともかく、西郷に薩摩方言的な語り方をさせていることが、本稿における注目点である。初編では「隠くしても匿くせぬ薩摩訛り」（一五〇頁）とはあるものの、大久保との会話以外では、薩摩方言的要素が弱いが、統編になってからは、会話の相手が薩摩人でなくても、同じような言い方をする傾向が強まり、その七二二頁からの、有名な勝海舟との江戸開城についての会見場面でも次の如くである。西郷の言葉のみを抜き出す。

「やア、勝先生でござしたか」

「今度ア、先生もお困りめし申したか」

「御説の御尤^ごござす、ぢやが恭順するなら、相当の所に謹慎しなはつたら、何ぎやもん^どござせう」

「せいなら、江戸城は直ぐお渡しにない申すかな」

「軍艦は渡せんとでござすか」

「聞けば、却々^{なかく}むづかし^なか御議論もござせう、細か項目は、何ぎやんにもならう、先生仰せは明後日の進撃を中止せいとでござすな」

『伊藤痴遊全集』（昭和四年、平凡社）では「やア先生^ごわしたか」（第二卷一〇二頁）など、若干異なるが、薩摩言葉を基調としていることに変わりはない。

痴遊の『月照薩摩落…安政疑獄』（新橋堂ほか、明治四三⁽²⁴⁾）は、

地の文がデスマスの講談調であるが、西郷は、薩摩弁を使っている。

伊藤痴遊「西郷隆盛」と同年刊の講談速記本、松林伯知「西郷隆盛」厚生堂⁽²⁵⁾には、少年期の会話に、

「貴君^{あんた}アが所の伴^{とも}どんが己^おどんの頭^いア強^いう打^はりをつた。己^おどん鬘^{まん}たア刎^きねをつてやらうと思ひよつたが貴君^{あんた}ア甚^いう身分^{身分}が好い人だチウから姓名^{せいせい}だけ助けてあげるでござす。向後^{かうご}斯^かういふ事ヨカすると鬘^{まん}たア打ち切るで貴君^{あんた}ア其^{その}の氣持^{きじ}でヨカ意見^{いけん}さつしやれ」

が見える。勝海舟との対話には「ござる」を使うなど薩摩的要素が弱まるが、岩倉具視には、「イヤ今日の事は平素の場合と異なつてござす。朝鮮使節の件は我等自ら主張せしところにして又いささか考ふるところもござす」（二〇六頁）と語っている。

松林伯知は、松林伯田の弟子であるが、篠田鉦造『明治百話』（昭和六年）に「上野公園梅川亭の一夜」があつて、次のような話が載る（二七三頁。岩波文庫では下巻二二頁）

明治の氣分に漬る或会で、まず松林伯知が明治初年の伯田物——新聞のタネをすぐ講釈に演じた、『三千両小僧の米櫃』が一席演じられる。（中略）巡查の薩摩言葉が話題になつて、田中智学翁「伯田は苦しくなると巡查を出すと、よく言つたものであるが、巡查が出ると、巡查が出たといつて、聴客は又喜んだものだ」と

東京の巡查に薩摩言葉が多かつたことは、森銑三（一九六九）・

飛田良文（一九七五）などでも取り上げられるなど、よく知られているが、伯円がそれを演じていたらしいことが伺える。

ただ、『百花園』に掲載の松林伯円「横浜奇談・米櫃」の第十一席（一六二号、明治二十九年一月）にみえる警官には、薩摩訛りを示すものが見られない。

伯円の「明治叛臣伝」では西郷も取り上げられている。『百花園』二〇二号（明治三十年九月）の第四十四席に見える「我は西郷である」のような語り口で、共通語的でないものは、一八五号の「待つ事出来ん」ぐらいのものである。

『百花園』の中では、松林伯知「幕末名士伝」の西郷は「ヨカ」「オイドン」「ごわす」などを使う。例えば、第七席（二二一号、明治三一年六月）に、

己^{おい}どんは九州武士で、ヨカ当水戸に來り、藤田先生の教へをうけて、国家百年の大計を為さんとする、我が私^{わたく}しの怨みに、憤争をなすなんといふ、其のやうな小事に拘泥する、西郷吉之助ではごはんせん、

ここでの「ヨカ」は、「ヨカ為る^すけへど」などともあり、薩摩弁的要素を示すただけに使われているようである。話し相手は、藤田東湖の「塾の青年輩」であるが、西郷は常にその様な話し方をしていくわけではない。

西郷が、山岡鉄舟や勝海舟を相手に「おいどん」「ごはす」混じりで話しているものとして、坂本忠一郎『西郷隆盛伝』第三編⁽²⁶⁾（明治四二年、精華堂）がある。

己^{おい}どんが吉之助でごはす「……」山岡氏の言葉御道理^{もつども}でごわす、（四三頁）

イヤ勝先生、この二人は、中村、村田と申し居りまして、己^{おい}どんの最も股肱でごはす、以後御見知り置かれて宜しくお頼み申すでごはす、（五七頁）

明治四四年の野華山人『西郷隆盛』立川文庫⁽²⁷⁾では、方言的要素は乏しい。

講談本以外にも目を向けると、山崎忠和『南洲八面観』（明治四二年、右文館）は、勝海舟との会見場面でも、薩摩弁的なものを使っている（勝海舟も「さうさ軍艦かい」という調子である）。

御説を伺上げ申すと御尤^ごごわんす。ぢゃが恭順^{きんそん}と云るなら、その実をお挙げやらんにや。それで慶喜公が何^{なん}如^{ごと}までも御引籠^{かご}やつて謹慎^{きん}めすことがごわんすなら、相当の所に謹慎^{きん}した⁽²⁸⁾が可^よか。そいは上野であらうと、余所であらうと……⁽²⁹⁾

という具合であるが、

南洲の大きな体は横にごろりと転がった。そして、「ぼんぼが痛いよ、ぼんぼが痛いよ。」児童が腹が痛^{いた}いッて泣くかのやうな真似をした。⁽³⁰⁾

という部分がある。これは、『史談会速記録』四八輯の寺師宗徳「柴山景綱君越後口出軍中の事歴 附三話」（明治二十九年八月の談話）が引用する柴山景綱の記録にある逸話であるが、⁽³¹⁾ここでは、「ボン／＼ガ痛イトハ腹痛スルト云フコトニテ小兒等ニ対シテ唱フル方言」と注されている。「小作トハ小慧^{コサカシイ}ト云フ義ニテ専ラ少年

輩ノ間ニ唱フ方言」「コンダハ今回ノ方言」「ヒドヒ」ハ苦難デハナイカノ方言」や、「ヒタルク」に対して「饑ルノ方言」など、必ずしも薩摩の俚言ではない言い方に対して、態々方言であると注記しているようで、興味深い部分である。山崎忠和には「情の南洲」(明治三四年 <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/781420>)があり、これは文語体で書かれていて、西郷の言葉として「もうせんがよか」(二三頁)が見える程度である。ただし付録として「快男児」という、永山弥一郎を主人公とした小説のようなものがあり、ここでは永山らが薩摩弁を多用している(西郷は登場しない)。下中弥三郎『西郷隆盛伝』(明治四五年、内外出版)には、『勝先生でも、此の度は、お困りでござえう。ワハハハ。』(三四三頁)などに見える。

平山蘆江⁽³⁴⁾『小説／西南戦争』(大正一五年、至玄社)は、西郷を含めて多くの人が、「ごわす」などの薩摩弁的な言い方をしているが、あまり薩摩弁的な要素は強くない。後の「薩摩兵児」(昭和一七年、淡海堂)では、薩摩弁的な要素が強くなる会話もあるが、話し相手などにより、共通語的な物言いも見られる。

西郷隆盛を主たる対象としたものではないものについては、ほとんど見ることが出来ないが、たまたま目についてものを挙げておくと、安田直『西郷従道』国光書房、明治三五年で西郷隆盛は「差し支へはなか」と語り、弟の従道も「叶ひまつせん」と肥筑的な物言いをする。

四 『大西郷の心の奥底』の影響

石井蘇山『西南秘史／大西郷の心の奥底』(大正六年、白水社)を取り上げる。自序によれば、伊東祐亨の「先生の深意直話を書いて置けよ」という勧めにより、白水社社長の福岡易之助の「文章は口語体で」との注文で、「座談の通りに」書いたもので、本書中の西郷隆盛らは、一貫して薩摩弁的な語り口なのである。ただ、吉町は「肥後方言が活躍する」と指摘している。どれが肥後方言であるのか明示はないが、例えば、西郷の言葉の中に「まつせん」「まつしゅう」の形が見える。吉町義雄(一九五一)は九州各地の「ます」の形式を整理しているが、それによれば、福岡・佐賀・長崎・熊本と宮崎県西臼杵では「マッセン」と「マッショー」(処々でマッシュー)となるが、宮崎県の他の部分や鹿児島では、「モ(ー)サン・モハン」「モ(ー)ソ(ー)」となるのである。

著者である蘇山石井平太は、当人の話す際にも「ごわす」を使うが、蘇山という号や、十四頁に「熊本から私学校へ行つて、私学校党に属して居る」というあたりから、熊本に縁のある人のように思えるが、四四七頁で「おれも辞職して帰国しよう」と、「国へ帰つて早速武村に西郷先生を訪うて」いる。『西郷隆盛全集六』の「西郷隆盛・西南戦争関係文献目録」の解題などには、「佐賀県士族」とあるが、その出自は未詳である。

本書一三頁に「二十三年から先生の若党然と跟いて居つたが、殊に維新後先生の東北巡視の時は、ちよつと半年ばかりずうつと

毎日随従した」とある。二一頁に「既に七十歳」とあり、大正六（一九一七）年に七十歳ならば、嘉永元年（一八四八）の生まれで、同頁の「上村大将より一つの年長」という記述とも合う。ただ、その二十三歳と言えば、一八七〇年で、五〇頁に見える、明治元年に「先生が上野黒門口の激戦中、矢石の間に立ちながら著者に指令せられた」というのよりも後になるので、二十三歳よりも以前から、すぐ近くではないものの、行動を共にしていたのであろう。山岡鐵舟や勝海舟も江戸語らしきものを使い（勝が山岡に「兵士が亦多くは九州武士なれば、江戸つ児の貴公の言葉は通ぜまい」と言っている。四四頁、京都の人々も「西郷はんとやらしいて、きつうえらさうなお名前ですがな」というような上方言葉を使う（一四七頁）。

本書が後世に与えた、隠れた影響と考えられるものとして、征韓論の議論の際の三條実美への演説というのがある。例えば、司馬遼太郎『翔ぶが如く』⁽³⁶⁾「好転」の中で、

このころ、惜しいことに日付のはつきりしない、廟堂の席上、西郷が、三条実美に対し、じゅんじゅんと説いたというその内閣記録なるものが残っている。この資料の真偽のほどはわからない。

記録の西郷のことばに、薩摩弁がまじっている。

として、断片的に引用されるものである。

これは黒木弥千代（一九六五・一五八・九頁）に、「この演説の記録が内閣記録として残っているのであって、この記録の発見は

〈大西郷全伝〉の著者として有名な雑賀博愛氏（福岡県出身の国士的学者）が五巻を出版した後、内閣の書庫から見付け出されたものである」として『大西郷伝』は昭和十三年刊、全文が載せられ、野中敬吾（一九七〇）に、「西郷南洲翁口述筆記・鹿野山人（雑賀博愛）昭和十三年十月・謄写印刷六頁（本文二頁・解説四頁）」からとして、一部載せられ、毛利敏彦（一九七八・一三六頁）で「この文書は全くの偽物だと一概に否定できないと思うようになった」とあるものである。ほかにも載せられているものがあるが、これは、『大西郷の心の奥底』（三四二―三頁）から出たものと思われる。この本では、

太政大臣な、篤と聴いて於て下はれ。今の太政大臣は往昔の太政大臣でなく、王政復古、明治維新の太政大臣でござす。日本を昔からの小日本で置くも、大神宮の御神勅の通り、大、小広狭の各国を引き寄せて、天孫のうしはき給ふ所とするも、皆おはんの双肩に懸って居り申すでござんす。

と始まり、

おはんは俺どんよりか十二も年下ぢやけん、俺どんより跡へ生き残りまつしゅうで、只今申した事は、よう覚えちおつて下はれ。

と終わっている。「出来申さん」「当り申さん」の形もあるが、「置きまつせん」と「出来まつせん」「吞み込みまつせん」「残りまつしゅうで」のような、上記に示した薩摩的でない言い方が見える。黒木（一九六五）にみえるものでは、「生き残りまつしゅうで」で

はなく、「生き残りませうで」になっているが（『翔ぶが如く』も同様に「生き残りましょうで」、「まつせん」は、そのまま現れている。また最後の「下はれ」も熊本的なものである（吉町（一九五二）。黒木（一九六五）では「下され」となっているが、薩摩的な「タモレ」ではない。このような熊本の要素の入った言葉遣いが含まれることは、この「演説記録」が、本書から出ている蓋然性の高いことを示すであらう。

五 おわりに

以上、おおむね、大正時代ぐらいまでの作品を眺めてきた。明治三五年の高安月郊「江戸城明渡」あたりから、「ごわす」など薩摩弁の要素が目につき、明治末年の伊藤痴遊ではかなり薩摩弁的要素が見られ、大正時代のうちには、だいぶ定着していたように見える。

東條操が書き留めた、真山青果の所のw氏の「南洲翁の如きは当然薩摩訛でなければお客が承知しない」という状況も、当初は「ごわす」程度で満足できていたものが、より薩摩弁的要素を求めて、肥後方言などを取り入れてしまうに至った、と考えることが出来そうである。

薩摩人の中で、西郷隆盛が卓立した「薩摩人キャラ」になったのがいつ頃であるのかは、検討できていないし、金水（二〇〇八）が吉村和真（二〇〇二）を引用して指摘するような、西郷が薩摩弁的で、大久保が共通語的である、というような意識は、この頃

には見当たらなかった。

さまざまな点に於いて見落としがあるであらうし、演劇関係についても講談関係についても、また鹿児島方言についても、知識が不足しており、問題点もあろう。ご教示を仰ぎたい。

注

(1) この後、坪内逍遙の「どうせ鎌倉時代の話だし、何ちよつと訛らしく聞えればそれで結構です。方言そのまゝでは芝居になりません」という談話を紹介し、「名匠の用意には全く符節をあはせるものがある」とも書いている。<https://www.wildip.kotozora/pages/104.html> 参照。なお、このw氏の談話は、田中ほか（二〇一八）などに見られる、テレビドラマと方言との関係を思い起こさせる。演劇における方言については、田中千禾夫（一九七七一—一九七八）にも詳しい。

(2) 「声こそは薩摩なまり世にむつましい」色」むつ言。「詞」うらが様なめら。歌連哥にべる都人夢にも見やしめすまい。縁あればこそ抱いて寐てむぞうか者とも思しやうたもりめすと思へば。胸つぷしうはやくしやりめす。親もない身大事のせなの友達。康頼様は兄ン丈俊寛様は爺様とをがみたい。娘よ妹よとせろかくせろとぎやつてりんによがてくれめせかしと。ほろと泣いたるかはいさ。都人のごさんすより。りんによぎやアてくれめすが。「フシ」身にしみわたると語らるゝ。」（『日本古典文学大系50近松浄瑠璃集下』による。三二二頁。）この「薩摩なまり」には議論があるが、ここでは省く。

(3) この三部作において、「薩摩藩浪人」の益満休之助が「流暢なる江戸弁」を使い（薩摩藩士に対しても）、それは「二十歳越しては江戸弁が移りかねる」と十七歳の時に西郷から江戸探索を命じられ

たからだと勝安房に語らせたり、「あんた達は、薩摩の御藩中だの」と問われ、「わざと国訛りを出して」はい、然いごわんす」と答える薩摩藩士を登場させるなど、真山青果の方言使用についての意識は興味深いが、稿を改めたい。

- (4) 現実の西郷については、「西郷どんは世間を知っちゃる、鹿児島弁は使はれぬさうで『さうでござります』といふ江戸言葉を言はれるといふ噂ぢやった」という話もある(松原致遠編『大久保利通』(明治四五、新潮社)一六〇七頁。網淵謙鋭(一九九二)『人生覗きからくり』文春文庫での引用で知り、典拠を確認した)が、また別話である。

- (5) 昭和三年初演。全集第八巻所収。田中ゆかり(二〇一一)でも取り上げている。西郷隆盛は登場しない。

- (6) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/962957/110>

- (7) 『現代戯曲選集』九(大正十五年、春陽堂)による。

- (8) 岩田美穂(二〇一四)では、「『こわす』=『九州弁』の例が見られるようになるのは、昭和初期からである」とするが、後掲の高安月郊「江戸城明渡」(『こわす』)や二葉亭四迷「四人共産団」(『こわす』)など、明治三十年代には、それらしき状況が見える。「こわす」が薩摩で使われるようになったのは、島津重豪の開化政策で上方の言葉を流入したから、と言われることがあるが、ここでは措く。

- (9) 『日本戯曲全集44維新狂言集』昭和七年、春陽堂。台帳が国会図書館にある。 <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/2607206>

- (10) 『維新狂言集』では本文の後に「考へくして書いた変な漢語のこのセリフ」と見えるが、七之助の台詞にも「諸所の港に通信交易(しよきょうい)」「苛政(かせい)に屢々(しばしば)市民を苦しめ」などが見える。

- (11) <http://schoolniji.ac.jp/kinda/NIJL/NIJL-00790.html>

- (12) 岩波書店刊『学海日録』第四卷一〇四頁。

- (13) 後藤隆基(二〇一六)によれば、早稲田大学演劇博物館に、自筆台本と思われるものと清書台本があるという。

- (14) 後藤(二〇一六)は、この作品に台詞の重視を見ており、その頃の観客が、それほど台詞を聞いていなかったことを示している。なお、日置貴之(二〇一九)の、本作と真山青果「江戸城総攻」とを比較した所は、両作の台詞のありようを考える際にも参考となる。

- (15) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/954303>

- (16) 『現代日本文学全集5三宅雪嶺集』昭和六年、改造社による

- (17) 大正一五年の『我観』新年号にのる戯曲「大久保と西郷」は未見。

- (18) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/1016823/4>

- (19) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/1020667/130>

- (20) 『日本戯曲全集50』昭和四年、春陽堂による。

- (21) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/781421>

- (22) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/968827>

- (23) 少し前の六七八頁、初対面の幕臣山岡鉄太郎との会話でも「こわんは、西郷でうわすよ」などと言っている。

- (24) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/889923/> (『僧月照：西郷南洲外編』明治四四年、東亜堂書房 (<http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/781342/>) も同版)

- (25) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/890161>

- (26) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/890165>

- (27) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/890162>

- (28) 「あやめ」は「近松『平家女護島』の「薩摩なまり」に見えるものである。

- (29) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/781427/86>

- (30) <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/781427/94>

- (31) 岡島(予定)参照。なお、山崎忠和には「柴山景綱事歴」(明治二九年 <http://dlndi.go.jp/infoandip/pid/781533/>) の著がある。

(32) 『や、此は便利だ』でも知られる、平凡社の創業者である。

(33) <http://dndl.go.jp/infondlp/pid/781408>

(34) 平山蘆江は出身地である長崎の方言を写した「唐人船」（大正一五年）などが知られるが、「熊本籠城」（昭和一七年）では、熊本方言を写すなどしている。

(35) <http://dndl.go.jp/infondlp/pid/781428/14>

(36) 初出は「一九七」一六年の毎日新聞。文藝春秋から一九七五六年刊。文春文庫は一九八〇年刊。「好転」は、単行本で一冊目、文庫本で二冊目。

(37) 徳富蘇峰（一九六二）『近世日本国民史』九六（近世日本国民史刊行会）では、「西郷には幾許の仮託の談話・詩文などが多い。これは有名な人物には往々あることで、西郷一人に限りたることではないが、西郷には尤も多い。西郷が征韓論破裂の際に、三條太政大臣に切言したる意見として内閣に保存せられつつありと云ふ怪奇なる薩摩方言を雜へたる口語体の文書の如き……、それである」と否定している。

参考文献

岩田美穂（二〇一四）『「わす」 金水敏編著「役割語小辞典」研究社岡島昭浩（予定）「近代語資料としての『史談会速記録』」『コーパスによる日本語史研究—近代編—』ひつじ書房

金水敏（二〇〇八）『あとがき』（伊藤公雄編『マンガの中の他者』臨川書店）

黒木弥千代（一九六五）『大西郷の遺訓と精神』南洲翁遺訓刊行会

田中千禾夫（一九七七—一九七八）『劇的文体論序説』上下 白水社 特

に、下巻「二十一 方言、この《粹》なるもの」

田中ゆかり（二〇一一）『方言コスプレ』の時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店

田中ゆかりほか（二〇一八）『時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる！』

笠間書院

野中敬吾編（一九七〇）『西郷隆盛関係文獻目録稿—西郷隆盛観の変遷—』著者自刊（松山市）（続編等もあり）

羽田義朗（一九二六）『民衆映画としての南洲映画提唱』（『日本及日本人』八九号、大正一五年一月、「南洲号」と称す）

日置貴之（二〇一九）『明治維新劇の系譜における青果』飯倉洋一ほか

編『真山青果とは何者か？』文学通信

飛田良文（一九七五）『現代日本語の形成』『新日本語講座4 日本語の歴史』汐文社。特にその第三節「地方語の混入と同化」後に飛田

良文『東京語成立史の研究』（東京堂出版、一九九二）の第二部第

四章

毛利敏彦（一九七八）『明治六年政変の研究』有斐閣

森銃三（一九六九）『明治東京逸聞史』平凡社東洋文庫

吉町義雄（一九三九）『西郷南州方言文獻年譜』（九州のコトハ）双文

社出版、一九七六所収）もと、『日本文学』（鹿児島）新規第二卷

第二号 昭和一四年二月

吉町義雄（一九五一）『九州方言敬讓・希求助動詞活用分布相』『文学研

究』四一

吉村和真（二〇〇二）『新春鼎談 この愛すべき異彩の面々』『西日本新

聞』二〇〇二年一月一日

渡辺保（一九九七）『黙阿弥の明治維新』新潮社 二〇〇一年に岩波現

代文庫

本稿は、二〇一六年の研究集会「バリエーションの中の日本語史」で発表した「近代中央語における鹿児島方言」(<https://www.academia.edu/35701886/> 中央の鹿児島.docx)の一部を発展させ、関西大学東西学術研究所第二三回研究例会（言語接触研究班）（二〇一八年二月一〇

日)で発表した「近代方言意識史を目指して——西郷隆盛はどう語らせられてきたか」を発展させたものである。

引用に際して、字体は通行のものに改め、振り仮名は適宜省略した。
『百花園』は日外アソシエーツのDVD-ROM(二〇一四)による。

(おかじま・あきひろ 本学教授)